

## 知床半島のヒグマ保護管理に係る現状の管理における課題

- 遺産地域内及びその隣接部の広範な地域において、人とヒグマの接触が日常的に発生しており、追い払い等の実施のみでは人慣れ個体を減少させることは困難と考えられる。人とヒグマの接触を減少させる措置、あるいは、接触を管理する方策が必要。
- 例えば羅臼側では、10年前と比較して人を見ても逃げない個体、道路や人家付近で日中に出没する個体が増加している。これは、山間部と市街地が隣接しておりクマにとって人慣れしやすい環境であることが一因と考えられる。これを軽減するため現在取り得る対策としては、段階1のクマを積極的に捕獲するか、電気柵を設けてクマの立ち入りを防止するしかない。現状のままでは、大幅に対応件数が増えると考えられる。
- 利用者はヒグマ観察の機会を求めており、追い払い等の保護管理活動との対立が存在する。追い払い行為への理解を求める普及啓発が必要である。
- 不特定多数の利用者及び地域住民に対して、効果的な普及啓発・行動管理が実施できていない。例えば、カメラマン（羅臼町でも最近増加傾向）や釣り人などによる不適切な接近の制限の防止や、ゴミや干し魚などの住民生活上の誘引物の管理などを徹底する必要がある。駆除される個体の中には、不適切な写真撮影が大きな要因となる個体もいる。
- 現地での対策を担っている猟友会と知床財団の事務所からの距離が離れている箇所については、迅速な対応が困難である。先端部の番屋やカムイワッカ、羅臼湖などの拠点での安全確保も課題である。
- ヒグマの保護管理活動の件数は、年間700件以上となっており、夜間も含め恒常的かつ膨大で早急な対応が必要となっている。対応労力の軽減を検討する必要がある。
- 斜里町、羅臼町の猟友会の主力は50代、60代であり、現在と同様の体制を維持できるのはあと10年程度と想定される。また、知床財団においても、ヒグマ対応経験が3年以上の職員は6名である。そのため、人材育成や新たな対応要員確保のシステムの構築が必要。
- 産業や生活への被害、利用者との軋轢は軽減せず継続的に発生している。最近では、知床峠や知床岬トレッキングルートなどで危険事例が発生している。直接的な被害のみだけでなく、人身被害を想定した不安感など精神的な被害も存在している。
- 電気柵の設置は、ヒグマとの軋轢を軽減する上で有効だが、設置した場所としない場所で不公平感が生じ、管理コストも必要となる。

○管理方針は個体数が減っていないという認識に基づいているが、増えているか横ばいかは不明である。住民アンケートにあるように、順調に増えている可能性もある。その場合、管理方針の前提を順応的に見直す必要も出てくるだろう。5年後の見直しはその意味でも重要である。エゾシカなど多くの場合、このような方針転換は手遅れになり、将来に大きな負担を強いることになる。

○追い払いを行って初めて知床の人とクマが共存できていることは、観光客にも広く周知すべきである。